

魔法科高校の劣等生でもまた好き勝手にやってみる。

ガイドライン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースの世界にいました。いたのに”魔法科高校の劣等生”の世界に飛ばされたハジメ。そして何故か一緒に付いてきたロビン。

……………最初に謝ります。この世界、ワンピース同様にハチャメチャに壊れると思いますので。

そして中途半端は知識しかないので間違いないだらけの、勘違いだらけのお話になります。ノリと雰囲気だけで書きますので、それでも良かったら……

そんな世界が変わっても変わらない二人を楽しんでください。

目次

- 1 あつちの世界からこつちの世界へ

あつちの世界からこつちの世界へ

魔法。

それまでは単なる伝説やおとぎ話の産物だったそれは、20世紀の終わり頃に超能力の存在が公式に確認されたことで現実のものとなった。最初は突然変異で現れる「特別なもの」という見方が強かったが、世界各国の開発競争もあってここ100年の間にすつかり「技術」として確立されるようになった。

……長い。すでに前口上が長い。

こんなことを毎回書かなくてもこれが「魔法科高校の劣等生」というのは分かるだろう。

すでにメタ発言をしているが仕方ない。

僕にはこの世界を知っている。知識があるのだ。

主人公の司波達也と司波深雪。この二人を中心として進んでいくストーリーは面白い。

なのに、そこに異物がある。もちろん僕だ。

ちなみに冷静でこうやって話せるのは理由がある。

「そうなのね」

「……………信じてる？」

「お兄ちゃんが言っていることだから信じるわ」

「驚か…ないの?？」

「お兄ちゃんがいるから問題ないわ」

……………安定してるな。

頼もしいのだけれど、なんだろう……

きつとこの世界、マトモに本編が進むとは思えない。

「それでどうするのお兄ちゃん？」

元の世界に帰る方法でも探すの?？」

「それに関してはまあ、時間はかかるけど戻れるよ」

「そう。ならそれまでどうしましょうか？」

「……………ねえ、ロビン」

「なに、お兄ちゃん」

どうせしばらくは帰れないのだから、そして、この世界もif的な、パラレルワールド的な世界なんだろうから……

「とりあえず世界征服してみない?？」

「お兄ちゃんがやるなら、やるわ」

少しも躊躇わないのね。ロビンらしいけど。

「まあ、表というか裏の支配者的なやつでね。

何かあったとき鶴の一声で政治も世界も帰れる的な」

「つまりは海軍、世界政府みたいなものね。

じゃ大将というよりもCPOに近いのかしら？」

「別に暗殺しなくてもいいから。

とにかくここには面白い人達がいるからね。

その子らがどんな風の世界を変えか見てみたい……!!」

「またルフィみたいなのを育てるのね。

本当にお兄ちゃんは面倒見が良いわね」

それをいうならロビンもなのだけど……

きつと否定するだろうから言わないでおこう。

「じゃどこから攻めるの？」

「十師族という日本の組織があるからそこからかな??」

「ニホン……国の名前なのよね??」

「そうそう。その国を基盤にやっつけていこう」

その時はまだ知らなかった……

司波達也が生まれてくるのは2079年。

確かに生まれてくる前にこの世界に来たのは良かったが今いる西暦は2015年。

魔法の開発が、魔法技能の開発から、魔法師として「優れた血筋」の開発へと舵が切られ、先進国間で激しい開発競争が開始された年であり、四葉深夜、四葉真夜が誕生よりも前だったなんて知る由もないなかった……

……………

2045年。

世界は第三次世界大戦を体験することとなった。

理由は簡単。食料不足や魔法師に対する牽制など、いつの時代もこういったことから簡単に大戦は始まる。

力を持ちすぎた者達は危険視され、無いものはあるものへ嫉妬する。

その考え方はどの世界に言っても変わらないようだ。

「な、何なんだお前は……ぎゃああああああツツ!!!」

いまもこうして理解のできない僕達に対して敵も味方も関係なく攻撃してくる。いや、味方いなかったなー

「本当にお兄ちゃん的能力はスゴいわね」

「いや、この世界にきて能力が変化したからね。

まさか歳を止めることまで出来るなんてこっちは想像も出来なかつたよ」

「そのお陰で元の世界に戻っても年齢は変わらないから助かるわ」

一時停止の力でも出来なかつた人の寿命の停止。

それがどういうわけかここでは出来るようだ。だから三十年経つても年齢も見た目も変わらないままである。

ちなみにこの周りの人達が化け物みたいな目で見ているのはそういったことではない。もちろん、いつも通りにロビンが暴れているだけである。

「げ、幻術だあ!!!こんなもの……ぐわああッッ!!!」

「に、逃げろッ!!!あんな化け物ッ!!!」

「勝てるわけがないッッ!!!」

「失礼ね。どのみち全員死んでもらうわ」

いやーロビンの”ハナハナの実”の能力はここでは幻術扱いされているのだ。まあ、突然手が生えてきたらそう見えるわな。

ちなみに僕の”トメトメの実”の能力は”振動”系に当たるようだ。

いや、全く違うけど訂正する気もないので勝手にしてほしい。

「あ、悪魔だ………悪魔の子だあああああああああッッッ!!!」

!!!

「……………こつちに来てもかよ……………」

「本当に失礼すぎるわ。殲滅ね」

まあ、やり過ぎないようにとは言っている。

やり過ぎて本編に出てくる登場人物達に影響があつたら困るからねー

……………

2062年。

大漢の崑崙方院に四葉真夜が捕まるということを知っている。

どうやら大切な時系列は頭に思い浮かぶらしい。

ワンピースとは違い常に更新されるわけではないから気をつけて行動しないと

が起きるか分からないなー

「女の子を誘拐？それにいま何しようとしたの??」

「ま、待て。私に手を出したらを貴様らはッ!!!」

「先に手を出しておいて。それに誰が何が来ても関係ないわ。さようなら」

いま現在も司波真夜を助けるためとはいえ、相手を雑巾のように絞らなくてもいいと

思うけどなー

「……………えっ……………??」

「やり過ぎだよ。ほら、怯えてる」

「女の子に手を出す時点で死刑よ。地獄でも同じ目に合うように念も込めたわ」

いや、マジでその念効きそうー

「あ、貴方達は……」

「気にしないでね。じゃ日本に帰ろうか」

「疲れたからお姫様抱っこがいいわ」

「それはいまからこの子にするから背中に捕まってる」

「それでも甘やかしてくれるお兄ちゃんは最高だわ」

う、うっさい!!!

……!!!……

2068年。

この年から、いや誘拐されてから四葉深夜は真夜を精神的苦痛から救うところから徐々に魔法を酷使し始め、この年辺りから体調を崩すことになる。

それがのちに命を落とすことになるなんて……

「それで、結婚はいつしてくださるの?」

「しないわ。いい加減にお兄ちゃんから離れて」

「兄弟での結婚は認められてないわよ」

「そんなものは既に変えてしまつたわ」

「真夜ツ!!!兄弟での結婚が認められたわッ!!!」
「貴女ツツ!!!」

「というところで結婚しましょう!」

「いいから離れてくださいッツツ!!!」

まあ、誘拐されてすぐに助けたから精神的に問題はない。

いや、あるけど。こうしてロビン化しそうになつてる真夜はもうアウトだと思う。

「ねえ、深夜。二人の精神、どうにかならない?」

「どうにか出来たら私、きつと、世界を変えられるわ……」

そんな遠い目をしないでー戻ってきてー

……

2079年。

四葉深夜が司波達郎と結婚して、そしてこの年に司波達也を産んだ。そして1ヶ月後に司波深雪が産まれた。

「ああーもうー達也が可愛くて仕方ないわ!!」

「真夜つたら……深雪も可愛いわよねー」

深夜に卵子が無く、真夜の卵子を使い産まれた達也。

その達也の世界を壊すかもしれない力を制御するために産まれた完全調節体の深雪。

一応、結婚している深夜が二人の親族となるが、事實は達也が真夜、深雪が深夜の子供となる。

だいたい本編では体調を崩したために卵子が作れなくなったのに、ここでは最初から作れていないって……初めはショックを受けていたがロビンが「真夜の卵子を下さい。そしたら二人の子供。ってことになるわよ」といい、完全調整体を生み出すときは「深夜の遺伝子がいいわね。そしたら二人とも子持ちね」と言ったためにこうなった。いや……普通はこんなデリケートな問題はかなり揉めるのにどうしてこうも納得するのが早いのか……やっぱり”世界”の調整力が強いのだろうか――

「この二人は絶対にこうでないと話が進まない。
だから色んなところで調節してくるんだろうな――

「ところでお兄ちゃん。私達は……」

「抜け駆けは駄目よ!!!私も!!!」

「貴女には達也がいるでしょう」

「まだ私は処女なのよツ!!!だから私とセ」

「子供の前で何言ってるんだあああああツツ!!!」

.....

2085年。

先代当主である四葉英作の遺言により、四葉真夜が四葉家3代目当主となるなった。そして同じ年に司波真夜により司波深夜が司波達也に仮想魔法演算領域を植え付ける手術を行う。

これは達也の持つている魔法“分解”がいつか世界を滅ぼすだろうという疑念からきたもの。そして仮想魔法演算領域は“強い情動を司る部分”を白紙にして植え付けた。その為には達也には感情というものが無くなつて……………

「何してくれたんですか叔母上」

「ま、待つて!!!これは達也の為を思つて……………だから”分解”はやめてツ!!!」

「だからやめたほうがいいつて言つたのよ……………」

ハジメの力ならきつと予定よりも感情的な部分が残るつて…」

達也によつて追い詰められる真夜。すでに真夜の周りは分解により分子レベルになつて消え去つていいる。

達也は深夜の子供であり、真夜が母親だとは知らない。世間的に、そして達也と深雪には精神的にキツイ話であるためにある程度心と身体が大人になつてから真実を話すことになつた。

そしていま、そんな様子を深夜の腕の中で娘の深雪は

「お兄様が私だけに向けられる感情。それはとても嬉しいですが、それでもやつてはい

けないことです」

「だ、だって!! 叔母である身として達也を危険な目にはツ!!!」

「その心遣い感謝しますが、どうして寝ているスキを狙って、了承も得ずに行つたのですか??」

「……………嫌って、いうと思つたから……………」

その萎れた表情にハアとため息をつくしかなかつた達也。

もうやられたことは仕方ない。それに真夜だけではなく深夜が直接手術をしたのだ。そうなると真夜だけではなく深夜にも怒らないといけないが、それではせつかくこうして懐いてくれた深雪を悲しませることになる。

達也は小さい頃から親である深夜、そして真夜と深夜以外の大人達に嫌われていた。どうしてなのか、それはなんとなく分かつてはいたのだ。 ” 分解 ” と ” 再生 ” 。 その ” 分解 ” を恐れていることに。

その為か同じ年である深雪も周りの大人を見て自分が怖い人だと認識していたようだ。しかし最近になって叔母である真夜を助けたという二人が久しぶり訪ねてきたことがあった。

達也は初めてだった記憶にない小さい頃まで一緒にいたという。

そしてここに久しぶりにきたその男性がこの四葉家を見て「つたく、くだらない……………」

2089年。

十師族選定会議が開催され、一条家、二木家、三矢家、四葉家、五輪家、六塚家、七草家、八代家、九島家、十文字家が十師族に選出された。

しかしその会議では一般人には知られないことがあった。

「というこ^とで、時崎 ^{はじめ}一はここに十師族の別荘 零の設立を宣言します」

突然のことで誰もが呆けていた。

いや、ハジメの隣にいる”時崎・N・ロビン”が大きな拍手をして、四葉真夜はハアアとため息をつきながら拍手をしていた。

.....

そして2092年。

ハジメと達也の沖縄で再会により世界はさらに大きく変化することになった。

まあ、ハジメ達はそんなこと気にしていないが.....